

新 おおさか KEYワード【第41回】

でぼちんを打っている落語碑はどないですか？ 大阪のコミュニティは活性化するのか

この9月に『大阪的 「おもろいおぼはん」は、こうしてつくられた』（幻冬舎新書 2018年）の著者である国際日本文化研究センター所長の井上章一さんをお招きし、シンポジウムを開催した。主催は大阪大学総合学術博物館と大阪市コミュニティ協会。「“大阪的”って何？」というタイトルで、副題が「水辺から考えるアート・大阪・大阪暮らし」である。



井上章一著「大阪的」表紙帯もインパクトあり

大阪人は自分たちについて、必要以上にオモシロおかしく語ろうとする。テレビの街頭インタビューでもヒョウ柄を着た「おぼちゃん」が登場し、そのイメージは全国に広がり、大阪は元気な「おぼちゃん」で溢れていると思われていそう。けれども、それは本当の大阪の姿だろうか。

古い調査だが、博報堂生活総合研究所が、全通行人中の何パーセントがアニマル柄の衣服やバッグを身につけているかを東京大阪の主要駅の改札で調べた。2005年は大阪3.5%、東京4.3%、2009年は大阪2.4%、東京2.8%で、東京の方がアニマル柄が多かったのである。しかし何故かヒョウ柄は大阪となり、大阪人もそれを演じることに喜びを感じるようになってしまった。

アニマル柄の「おぼちゃん」は面白いにしても、それを基準に大阪の歴史や文化を学んだつもりになったり、街の将来像を企画、設計して間違いはないのだろうか？

井上さんによると、「京料理」の職人も、大阪の料理店で修行をつんだ職人が多いらしい。古都・京都のブランドイメージに、大阪発の和食がからめとられているのである。大阪がつつちかってきた日本料理を知らずに、安価な「こなもん」ばかりを発信してきた結果とも言える。

パネルディスカッションでは、大阪大学総合学術博物館の船越幹央教授や、私のほか、上方落語協会会長の笑福亭仁智師匠も登壇された。仁智師匠と井上さんのヴェネチアに関する掛け合いが絶妙であったが、師匠から落語は現在の大阪でどのような立ち位置にあるのか、どうしていけばよいのかという趣旨の質問があった。

難しい問題である。上方落語には大阪人の知恵が結晶し、日常的な時候の挨拶や応対、古典芸能の教養ま

で耳学問の場として学ぶことができるし、もっと深い部分で、現実の社会に生きる人の生き様に影響してきたと思う。嘶家さんが体を張って表現している落語の世界には、古い知恵と新しい試みが錯綜し、そこに生まれる共感が生きる力になっているはずである。

また、名著『米朝ばなし—上方落語地図』（毎日新聞社1981年、後に講談社文庫）の愛読者として言えば、落語好きな人を増やすために、大阪市内の落語ゆかりの地にモニュメントを建てるのはどうだろうか。

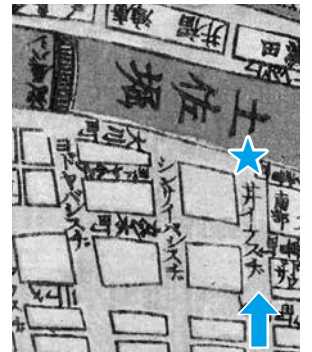
たとえば古典落語の名作「池田の猪買^{しし}い」では、主人公の喜六が池田（大阪府池田市）に行く道を聞く場面がある。物知りの甚兵衛さんに井池（現・大阪市中央区）からまっすぐ北に行けとにいわれ、土佐堀川に橋が架かっているないので、「でぼちん打つわ^{*1}」としようむないことをつぶやく。

このでぼちんを打っている像を、井池筋と土佐堀通りの交点に「落語碑」として設置するのはどうだろう。

「落語碑」の候補としては、淀屋橋南詰に「高津の富」にちなんだ雪駄^{せった}を履いて蒲団に寝ている男の像、高麗橋の大阪美術倶楽部の前には「鴻池の犬」の犬の兄弟、住吉街道には、駕籠屋二人と堂島の相場師二人が底の抜けた駕籠をかつぐ「住吉駕籠」、桜宮には、番茶を「おちやけ（お酒の洒落）」に見立てて酒盛りしている群像を置く。

こうして書いてみると頼りない話にも感じられるが、そこは「気は気で養え^{*2}」、今回の表紙は、試みに、でぼちんを打っている喜六の像の見本を作って撮影してみました。

*1 おでこを打つ *2 上方落語「貧乏花見」の一節



井池筋を北へ北へ進むとでぼちんを打つポイント（星印）。江戸後期の大阪図より。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現像—」（創元社）など。